

---

# Shadow !

たつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Shadow !

【Nコード】

N6368Z

【作者名】

たつき

【あらすじ】

そこら辺に居そうな女子高生、椿はある日の夜をさかいにシャドウと呼ばれる化物のような得たいの知れない生き物と戦うことになってしまう…

## good morning

「おはよう〜！ 椿！」

朝からテンションが高い友達の郁美の声が道路に響いた。

「おはよう〜相変わらず朝からテンション高いね…」

頭をかきながら椿が言い返すと、郁美は嫌みを言うように言った

「これだから椿は16歳にもうすぐなるのに彼氏ができないんだよ！」

「ヤカマシイ」

冷たい視線を郁美に向けた。

「有沢、おはよう」

後ろからなんとも男らしい声がした

ふりかえるとそこには背が高くいかにも運動部の体つきをした同じクラスの涼太が立っていた。

「お、おはよう」

椿は不意打ちをくらったかのようにあいさつを返した

「なにしてんだよ、朝っぱらから道の真ん中でケンカして」

椿と郁美は周囲を見渡すと通勤途中のサラリーマンやOLさん、小  
学生が自分たちをチラチラ見ながら脇を通ることに気がついた。

二人は赤面した

何事もなかったかのような顔で三人で学校に歩き出した

「椿、学校着いたら宿題見せてくれない？俺昨日忙しくて出来な  
かったんだ。」

「うそつけー！あんたはいーっつも！忙しいって言って寝たり、  
ゲームしたり、漫画読んだりしてんじゃん！この暇人が！」

椿は涼太を睨み付けた。

そのやりとりを見ていた郁美は椿の脇腹を肘でつつきながら言った

「おうおう♪朝からお熱いね♪」

「違うよ！」

二人の声が重なった

そんなやりとりをしながら学校へと続く坂を登り始めた。

## Friend

暑い

8月の終わりごろのクセに暑い

椿は歩みを進めながら汗をぬぐった

後ろから聞き慣れた女子の甲高い声が聞こえた

その声の持ち主は勢いよく椿と郁美に抱きついた。

「うわぁ！」

二人は前に倒れそうになった

「まったく、リンは〜」

郁美は呆れ顔で後ろから抱きついたリンに言った

しかし、リンは二人を放さなかった

それを見ていた涼太は苦笑して

「リン、また彼氏にフラれたんだろう！」

と言いはなった。

郁美と椿は涼太の言葉を聞いた瞬間一斉に涼太に飛びげりをくらわ

せた

「女心が分かんないバカ涼太！彼女いないクセに！」

「リンに謝れ！切腹しろ！」

二人は口々に言いながら涼太を蹴った

するといつから居たのか

「おいおい、二人ともそこまでにしとけて涼太が謝るに謝れないよ」

とても落ち着いた声がした

いつから居たんだよ！

みんなはツツコミたくなったが誰もツツコミする人は居なかった

涼太は制服に付いたホコリをはらいながら

「ったく、やっとそろったな」

「雄輔はいつもイツメン（いつものメンツ）の最後にそろろうよね♪」

リンは泣き止み嬉しそうに言った

★★

★★★★★★

校舎の中は心地いいくらい涼しかった

登校してきた生徒が何人かいたみんな汗だくだった

「あ、アタシ職員室によっていけないと行けないから先に教室行つてて」

椿が言うと

イツメンの4人はわかったと教室に向かって歩き始めた。

高校に入学してもう4ヵ月くらいだった

郁美と涼太は小学校から一緒だ  
雄輔とリンは高校で出会った

4ヵ月しかたっていないのにみんな大きく成長した気がした気がする  
なんだか急に寂しくなった

ヒンヤリとしたものが椿の心の中に広がった

## 帰り道

ホームルームが終わった

椿は一人で校門を出た

彼氏居ないから一人なの？って？ヤカマシイアタシにはまだ早いんだよ

郁美はバイトするから先に帰って

涼太はバスケ部だから…

リンは美術部で…

雄輔は背がでかいクセに茶道部で…

アタシは中学までバスケやっていたけど入部は面倒くさかったからやめた

椿は一人帰り道を歩いた

帰り道は行きとちがって人通りが少ない

夕日が美しく帰り道を照らした

★★★★★★

ガチャリ



ドアを開ける鈍い音が家に響いた

椿の親はアメリカに転勤した

アメリカに来るように誘われたが英語に自信がなかった椿は日本に残った

父親と母親はやたらとテンション高いそこが長所であり短所でもあった

いなくなつてやっと父親と母親のありがたさがわかった

なんだか今日は晩ごはんを作るのも食べるのも面倒くさかった

ドッサリと力なくソファ―に座りこんだ

テレビつけて数分は観ていたがそのまま寝てしまった。

## Shadow & Hunter

目が覚めた

家に帰ってきてソファ―に座って：  
寝たんだった

むっくりとソファ―から立ち上がった時計を見るともう8時になる  
うとしていた

辺りはもう暗闇に包まれ、外は街灯が輝いて見えた

なんだかお腹が空いたので何か食べようとしたが、作る気にはなら  
ない

学校のカバンから財布を引っ張りだし玄関へ行き外へ出た

外は昼間とは違い涼しかった

誰も居ない寂しい道をコンビニに向かって歩き始めた

街灯がついているとはいえ夜は暗い

人と時々すれ違うが近づかないと顔がわからなかった

★★★★★

コンビニの帰り

前から一人の人影が見えた

けっこう背の高い人だろう

外人の人かなと思った

だが顔が見えて椿は息をのんだ

全身真っ黒で顔には目と鼻がない

口は大きく鋭い歯がいくつも並んでいた

しかもデカイ

突っ立っている椿にその謎の生き物は長い手が凄い勢いで飛んできた

ギリギリ避けた椿だがしりもちをついてしまった

立とうと手をつくが恐怖で力が入らなかった。

謎の生き物はもう一度椿に攻撃してきた。

ヤバイよヤバイよ！人生最大のピンチ！これはなんかの間違いだよ！  
！そうだよ夢だ夢！

次の瞬間凄いスピードで何かが謎の生き物にぶつかった

謎の生き物は耳を塞ぎたいくらい嫌な叫びをはなって消えた

そしてぶつかったのは女の人だと分かった

「なにそこで座っている速く立たないか！」

怒ったような口調で言われた

街灯に照らされ浮かび上がったのはスニーカーに短い短パン、白いポロシャツをきたなんともナイスバディーな人だった

ルパン三世に出てくるフジコじゃん、歳はアタシより2つ上くらいかな？

椿は立ち上がった

「ありがとうございました」

と椿が言い終える前に女の人言い始めた

「礼ならいいよ、アタシは国枝リコ、19歳あんたは？」

「有沢椿」

「ふーん、まあ立ち話もなんだからあんたの家行ってさっきの生き物の説明するよ」

リコがクールに言った

椿は危うくはいと言ってしまふところだった。

「っておい！さっき会ったばかりの知らない人を家に入れるかあい！」

椿は思わずツツコミを入れてしまった。

「また、シャドーに襲われたいの？」

シャドー？なんじゃそれ？さっきの生き物？

「そうだよ、さっきの生き物だよ」

「そうなんだ、知らなかった…っておい！人の心読むなあ！というより読めんのかい！」

「なんだ、ツツコミのセンスなかなかあるじゃない」

自分のツツコミのセンスに驚きながらもなんか面倒くさいのでリコを家につれて行くことにした。

## Identity

シャドー

それは、普通の人は魂とともに跡形もなく消え去るが生きている時に殺人、盗みなど悪事を犯した人間、又は強い恨みや憎しみ、後悔の念が強すぎる人間が死んだ時に肉体と影が分裂する。その影は分裂したあと本能のまま夜の闇を歩きまわる影のこと。

昔の人間はこの影をみて妖怪、幽霊、悪魔などに例えた。

「さあ！分かったかな？」

リコはドサツと椿の部屋のベットに腰をおろし、床に座る椿を見下ろした

「うーん、だいたいわかったけど…パペットやめてくんない？なんか子供扱いされてるみたいで嫌だ」

「いいじゃないかい★あんたまだ13か14だろ？」

「違うよ！どっからどー見ても15歳だろ！」

「嘘つけ！そんな貧乳な15歳見たことないよ」

「ヤカマシイ、全国の貧乳に謝れ！」

「ナイスツツコミ！」

リコは親指をたてた。

「はぁ、いいから話を続けてツツコミ入れるの面倒くさくなってきた。」

「勝った」

リコは勝ち誇ったかのように右手のコブシを上げた。

勝負してたのかよ！もう疲れるからやめてくれない？

リコは椿の心を読みとったかのように真面目な顔に戻りパペットで話を進めた。

★★★★★★

シャドーは夜にしか行動出来ず朝になると陰の世界か、日が当たらない場所に身を隠す。太陽に当たると消えてしまうからだ

陰の世界にはシャドーしか出入りできない

そしてシャドーは狩りをする。ごくまれに生きているのに影の力が

使える人がいる。シャドーはこの人間の心臓が餌だ

影の力が使える人間は大きく3つに分けられる。

1つは、ただ影の姿が見えるだけ

2つ目は、影の力が強すぎてシャドーになる人

3つ目は、影の力を完璧に操る事ができる人でシャドーを狩る人：シャドーハンターとよばれる

3つ目の人は神歩きといって一瞬で10メートルから100メートルの距離を移動でき、体を影の力でコーティングし固くして攻撃できる。強い衝撃にも耐えられる。

シャドーハンターはこの町にリコ合わせて5人いる。一般人には正体がバレないように活動している。

★★★★★

「説明は以上だ、まああなたは1つ目のただシャドーの姿が見えるだけの人だからせいぜい心臓食われないように頑張れ、いざというときシャドーハンターの誰かが助けてくれると思うけど…」

急にボケなくなったよこの人：

椿が心の中でツッコむとピピピ…と携帯がなった

どうやらリコの携帯らしい

リコは携帯をみて



「お！シャドーが来たぞ♪んじゃ、退治して来るからまたね♪」

「あ、はいさようなら、パペット忘れてますよ」

「ああ、あんたにあげるよ」

そう言い残してリコは二階の椿の部屋の窓から飛び降りて夜の闇に姿を消した。

## **T r u s t   &   a   m   p ;   R i f t**

リコが夜の闇に姿を消したあと椿はしばらく窓の外を眺めながら突っ立っていた。

自分の身におきている事が信じられなかった。

そういえばコンビニで買った物をシャドーに

襲われた時に落としてしまった事に気付いた

少し怖かったがシャドーが本当に存在する事

を否定しなかった。

★★★★★★

外に出るとやはり涼しかった。

まシャドーに襲われた場所に向かって歩き始

めた。

道路には誰も居なかった。

帰宅途中の人もウォーキングする人も

誰一人居なかった

★★★★★★

シャドーに襲われた場所についた。

まだコンビニで買った物が入った袋があった

椿はそれを拾いあげるとそのまま家に向かっ

て歩きだした。

しばらく歩いていたらいきなり耳を塞ぎたい

くらい嫌な叫び声が聞こえた！

振り向くと真っ黒で目と鼻がないシャドーが

立っていたさっきのよりもデカイ

恐怖で体が動かなくなった。

助けを呼びたいが椿以外誰も居ない

シャドーが長い腕を椿に向かって降り下ろし

た

椿は避けきれずにバットで跳ね返された野球のボールのようにぶっ  
飛んだ

ガッ！

椿は近くにあった街灯に右肩からぶつかった

激しい痛みが指先まで伝わった

脱臼したらしく右肩からしたが動かない。

食われる

椿は死を覚悟した

シャドーは次に椿の胸に向かって鋭くとがり始めた手を伸ばした

目を閉じてシャドーが自分の心臓を取るのを

待った

が、

シャドーの悲鳴が聞こえて痛みがなかった。

目を開けると見覚えのある人たちが立っていた

椿は目を疑った

そこにいたのは

リコ、雄輔、リン、涼太、郁美だった

「なんで？」

椿の口から出たのはお礼ではなかった

「ごめん」

リンが力なく言った

「仕方がなかったんだ」

涼太が言うともみんなうつむいた

「いつから？いつからシャドーハンターやってるの？」

「5年くらい前から」

雄輔が答えた

「知らなかったのは私だけ？」

椿の心に寂しさ、怒り、悲しみが広がった

「いいじゃないかい、これでみんな揃ったんだから」

リコが言った

椿は脱臼した右肩を押さえながらうつむいた

「友達だったのに」

リコは椿が脱臼している事に気付いて椿の肩に手をかけた

「脱臼治すから我慢しろよ」

そう言って椿の脱臼を治した。右肩の

痛みが消えた

「帰る」

椿は家に向かって歩き始めた

雄輔が待つてといったが郁美が止めた

★★★★★

自分の部屋につくとベットにもぐりこんだ

涙が止まらなかった

なんで私だけに秘密にしたの？

友達じゃん！

私だけ仲間外れ？

色々な思いで椿の心は一杯だった

## **T r u s t   &   a   m   p ;   R i f t   (後書き)**

字の間違え、意味が分からないところがあれば遠慮なく言ってください！

あと、読んでいただきありがとうございました続きは早めに書きたいと思います！次回からちよいちよい椿を戦いに巻き込んでいきたいと思っています。

## Bond

次の日の朝、椿は一人で登校した。

学校に行くと郁美たちが話しかけてくるけど椿は無視した

★★★★★★

一日が終わった。

たった一日だったけど椿には長く感じた。

椿が一人で校門を出た時だった

「椿！」

呼び止められて振り向くと郁美、涼太、リン、雄輔が立っていた

けど椿は無視して歩き始めた。

「待って」

郁美が椿の左手をつかんだ。

「はなして！！5年間もアタシに秘密で…」

椿が言い終わる前に涼太が口を開いた

「仕方がなかったんだ…」



涼太が言い終わる前に椿が涙目になりながら口をはさんだ

「仕方がなかったって？友達なら話してくれたっていいじゃん！」

「捲き込みたくなかったんだ！大切な仲間だから」

ずっと黙って雄輔がいきなり言った。

こんなに必死でうったえる雄輔の姿を見るのは初めてだった。

けどこの言葉を聞いて椿の心には悲しみや怒りが消えた

それと比例して感謝の気持ちで一杯だった

みんなが私のために言わなかったんだ…

「ありがとう…」

椿が呟くとみんな笑顔になった

その日は久しぶりにみんなで帰った

★★★★★★

日がどっぷりと沈み辺りは闇に包まれた

「ねえ！シャドーハンターってどんな技使えるの？」

「え!?! リコさんから聞いてなかった?」

郁美は椿の顔をのぞきこむようにして言った

「リコさんの説明イラッときて途中までしか聞いてなかったから…」

「確かに、リコの説明はイラッとくるな」

涼太が苦笑を浮かべた。

リンがいきなり手をあげ4人の前に出た

「んじゃ、私が説明するよ♪」

シャドーハンターの技は3種類あるよ

1つ目は手のひらから影をかためて赤くして火の玉みたいにして飛ばす技! 射義しやぎ

2つ目は影で体をコーティングして攻撃するの! 強い衝撃にも耐えられる技! クッション♪

3つ目は影を刀の形にして刀を作って攻撃する陰刀!イントウ

ちなみにシャドーも同じ技が使えるよ」

「へえ」

椿が興味深そうに聞いていると雄輔がいきなり言い出した

「けどその技は一人につき1個しか使えないんだ、リコさんでさえ

2つだけしかできないちなみに2つ目と3つ目のやつだよ」

「俺と雄輔は2つ目のクッション、リンと郁美は射義でもみんな神歩きは必ずできる」

涼太が言い終えた瞬間だった

椿以外の携帯がなり始めた

涼太が携帯をみて驚いた

「ヤバイな、今回のシャドー強すぎる」

「どうしてわかるの？」

「シャドーはこっちの世界に現れる前に陰力といって電波みたいなのを現れる場所に発するんだよ、それをリコさんの曾祖父が発明した変な機械が感知して郁美たちの携帯に発信するの♪レベル1からレベル5の評価つきでね♪レベル1が弱いのだ♪」

郁美は得意気に話した

その時だった。

星が輝く空にブラックホールのような穴が空いた。

「椿さん下がって」

雄輔が真面目な顔で言った。椿はみんなより少し後ろに下がった

空のブラックホールのような穴から明らかに前のシャドーより大きい

いのが現れた

4人は構え雄輔の合図とともに攻撃した

がシャドーは攻撃をいとも簡単に跳ね返したどうやらこのシャドーはクッションの技が使えるらしい

そして4人を目にもとまらぬ速さで硬く鋭い手で切りつけた。

この残酷な光景を目の当たりにしていた椿は何もできない自分に腹がった。

アタシはこんなに仲間が苦しんでいるのに何も出来ない…

ギュッと握りしめた手を緩めた瞬間だった

右手に黒いモヤモヤした物が現れた

それをつかむとハッキリとした刀の姿が現れた

陰刀だ！

気付いた椿は無我夢中でシャドーに切りかかった

椿はスゴイ速さで動いた

椿が神歩きをして地面を再び蹴って移動する時しか椿の姿が見えないくらいだった

「速い…」

涼太が呟くと雄輔がなにか恐ろしい物でも見たかのような顔で

「もしかしたらスピードはリコさんと同じくらいじゃないか？」

シャドーは椿の動きについてこれなかった。

隙をみてシャドーに頭を切った

シャドーは悲鳴をあげて消えていった

「スゴイじゃない椿！」

郁美が傷口を押さえながら立ち上がった

みんなが椿の元へ行こうとした。

その時、椿が胸を押さえて両膝をついた

「うう」

苦しそうに声をあげた

よく見ると椿の体に黒い影がまとわりついてきた

それは椿を包み始めた

「ヤバイぞ！このままだとシャドーになっちゃいます！」

リコの声がした。上を見るとリコが空から落ちてきて着地した。

椿を包んでいた黒い影は椿から離れたが椿は真っ黒いシャドーにな  
っていた

「ああ〜椿！」

郁美の声が響いた

## **Bond** (後書き)

今さらですが登場人物の説明をしたいと思います。

主人公 有沢椿、15歳もうすぐ16歳で三人家族だけど両親は転勤で海外にいる

井上郁美、16歳、小学生のころから椿と一緒に勉強が得意

天野リン、15歳もうすぐ16歳椿とは高校で出会った。小柄だがチャレンジ精神がある

瀬戸内涼太、16歳椿とは小学生のころから一緒に背が高くスポーツが得意

菊池雄輔、16歳みんなとは高校で出会った。背が高く落ち着いた性格でイケメン。けっこうモデル

国枝リコ、19歳一番シャドーハンターの経験豊富。けっこう強くナイスバディー。

誤字脱字等があったら言ってください、感想やご意見をいただける嬉しいです。

# Philosophy

「ああ、椿！」

郁美の声が響いた。

「どど、どうしよう！椿が椿が椿がシャドーになっちゃった！」

リンがうろたえた。

「椿…」

雄輔はガツクリと膝をついた。

「いやまだだよ」

リコが目を細めシャドーになった椿を見つめた。

「?？」

みんなが啞然とリコをみつめた

「よくみてみな、アイツにまだ目があるよ。もしもアイツが完全にシャドーなら目が無いはず、アイツはまだシャドーになってない！まだ望みはある！あきらめるな！」

その言葉を聞いて雄輔は立ち上がった

「で？どうすればいいんだ？」



★★★★★★★★★★

郁美の声は椿本人にも聞こえたが椿は暗い闇の底に落ちた

「どこだ？」

周りには誰も居なかった

暗闇が一層椿を不安にさせた

「ここはこれから貴方が暮らす世界です」

振り向くと見知らぬ老婆が立っていた

腰まで伸びた長く白い髪、優しそうな目：

「? どういうことですか？」

椿が困った顔できくと老婆は笑顔を浮かべ静かに答えた

「貴方はよくご存知のはずです。ここは貴方自身の世界だから」

「アタシ自身？」

「そうです！ 貴方自身の世界！ 貴方はこの世界で生きようが死のうが自由！ ここでは悩みも苦しみも存在しないのです！」

老婆がいきなり声をはりあげたので椿は一瞬体をピクリと震わせたけど悩みも苦しみも存在しないのは魅力的に聞こえたが椿は郁美た

ちのことが頭に浮かんだ

「嫌だ：アタシは…」

「いいのですか？またあの友達に傷つけられても？」

椿は一瞬迷ったがやはり仲間たちの元へ帰りたかった

「いいよ、だから帰り道を教えて」

それを聞いてた老婆は驚いた顔をしたがまた笑顔をうかべ静かに言  
った

「ここは貴方の世界です。生きようが死のうが貴方の自由、帰りたい  
ければ帰り道を作ればいい、帰り道ができなければ貴方は心のどこ  
かでこの世界に残りたいと考えとる証拠です。」

老婆はいい終えるとどこかへ消えた

## **Philosophy (後書き)**

初めて小説をかいたのですが、飽きっぽい自分がここまでやれるとは思っていませんでした。まだまだ続けたいと思います。

これからもよろしくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6368z/>

---

Shadow !

2011年12月24日23時51分発行